

34. 新生児マススクリーニングの高ガラクトース血症に対する経直腸門脈シンチグラフィの有用性

池岡 直子 塩見 進 佐々木伸充
 栗山 真紀 森川 浩安 正木 恭子
 城村 尚登 黒木 哲夫 (大阪市大・三内)
 河邊 讓治 越智 宏暢 (同・核)
 岡野 善行 一色 玄 (同・小児)
 藤本 昭栄 (大阪市環境保健協会)

われわれは以前より経直腸門脈シンチグラフィを用いて、肝疾患における門脈循環動態の検討を行ってきた。今回は新生児マススクリーニング検査にて高ガラクトース血症を指摘された症例に本検査を施行し、その臨床的有用性を検討した。

対象は新生児マススクリーニングにて高ガラクトース血症を指摘された男児4例、女児2例の計6例で、年齢は1か月から2歳であった。それらの症例に対し、^{99m}Tc-pertechnetate 111 MBqを直腸腔内に注入後、5分間データ収集を行って積算イメージを作成し、さらに肝臓および心臓のtime-activity-curveより門脈シャント率を算出した。

その結果、門脈シャント率20%以上を示したのは2例で、ともに脾腎シャント、すなわち門脈系の側副血行路が認められ、うち1例は先天性門脈欠損症と診断された。一方、門脈シャント率が20%以下であった4例ではいずれも門脈系の側副血行路は認められず、うち2例は新生児肝炎で、残りの2例は一過性の高ガラクトース血症であった。また肝機能検査値は、門脈シャント率の高い群と低い群との間に有意差を認めなかった。

以上のように本検査は、非侵襲的に、高ガラクトース血症を示す新生児の鑑別診断を行える有用な検査であると考えられた。

35. FDG-PETが治療効果および再発の判定に有用であった肝癌の1症例

森川 浩安 塩見 進 佐々木伸充
 栗山 真紀 正木 恭子 城村 尚登
 池岡 直子 黒木 哲夫 (大阪市大・三内)
 下西 祥裕 重松 誠 河邊 讓治
 岡村 光英 越智 宏暢 (同・核)

昨年度の本地方会において、FDG-PETが肝細胞癌(HCC)の治療効果判定に有用であった症例を報告させていただいたが、その症例の経過途中にきたした再発の発見にもFDG-PETが有用であったので報告する。

症例は46歳、女性、C型慢性肝炎にて当院通院加療中であった。腹部エコーにて肝S3領域にモザイク状のSOLを認め、腫瘍マーカーであるAFPの上昇を認めたため、HCCを疑いその精査、加療目的にて、入院となった。入院後、血管造影等施行し、HCCと診断した。肝表面に突出するように存在したため、腹腔鏡下マイクロ波凝固療法(LMCT)を施行した。LMCT前後にFDG-PETを施行し、治療後のhot spotの消失が確認でき、また半定量的指標であるDAR値も5.47から0.46とbackgroundレベルまで減少した。CT、MRIの画像診断やAFPの変動からも残存腫瘍はないものと考えられた。

次にその経過中約2年後にAFPの上昇を認め、再発を疑い再発巣の検索を施行した。FDG-PET像では前回治療部位の腹側にhot spotを呈し、DAR=3.17と高値で再発巣と考えられた。同時期のCT、MRI等では描出し得なかったがFDG-PETでは明瞭に描出し得た。

HCCの治療効果の判定では、現在、造影CT、MRIがよく使用されているが、今回FDG-PETが他の画像診断、腫瘍マーカーの変動によく相関し、効果判定に有用であった。さらに、その経過中の再発に対して、再発巣の観察に有用であった。